

竜巻の予兆現象酷似

宮崎県延岡市で9月17日に発生し、死者3人を出した竜巻は、1999年に愛知県豊橋市で起き、415人が負傷した国内最大級の竜巻と発生状況が酷似していることが、名古屋大地球水循環研究センターの坪木和久・助教授(気象学)の解析でわかった。ともに台

9.17 延岡 99年 豊橋

風の雨雲の東端が差し加った際、極めて強い積乱雲が発生、竜巻発生 of 直接の原因になっていた。竜巻の発生予知は困難とされるが、「東端通過の際の積乱雲」は竜巻の予兆現象として注目されそうだ。

坪木助教授は延岡市の竜巻について、気象庁の観測結果を基に気圧、気温、風向・風速などのデータを、独自に開発した「雲解像モデル」に入力、時系列でパソコン上に再現した。これを、過去に国内で起きた竜巻と比較したところ、99年9月の台風18号の

坪木助教授は、積乱雲の下層で、南東と南南東から

吹いてきた強風がぶつかった間に、①延岡は台風の中心から東へ約330キロ、豊橋も東へ約450キロと、はるかに離れていた②台風

際に豊橋市で発生した竜巻との間に、①延岡は台風の中心から東へ約330キロ、豊橋も東へ約450キロと、はるかに離れていた②台風

今回の解析成果は、台風がはるか西にある時でも、沿岸地域で巨大な積乱雲が発生すれば、竜巻に対する警戒が必要なることを示すものとして注目される。

名大助教授解析

台風雨雲の東端に積乱雲